

現在、東京の Bunkamura ザ・ミュージアムで開催中の「デュフィ展」。愛知県美術館では10月9日から開催されます。



▲Bunkamura ザ・ミュージアムの展示会場。鮮やかな青色が南仏を想起させ、今の季節にピッタリ。

この展覧会を当館で開催すると決まってから何年たっただろうと思い、書類をばらばらめくったところ、2009年10月付けの、ポンピドゥー・センターの学芸員さん宛てに面談の依頼をする手紙が出てきました。ということは、5年前ですね・・・確かに、ラウル・デュフィという画家の展覧会企画としての出発は5年前ですが、個人的にはもっと長い時間を経たように思います。ここではそのあたりのことから、デュフィという画家の展覧会企画が立ち上がった経緯について書いてみたいと思います。

当館では開館当初からコレクションにある重要なモダン・マスターの展覧会を開催してきました。たとえば、「パウル・クレーの芸術」(1993年)、「色彩の宇宙 クプカ展」(1994年)、「没後50年 ボナール展」(1997年)、「ミロ 1918-1945」(2002年)、近年では「マックス・エルンスト ——フィギュア×スケープ」(2012年)、「クリムト 黄金の騎士をめぐる物語」(2012年)などが挙げられ、これらの展覧会の多くが愛知県美術館の学芸員による独自企画です。私自身は、ボナール展あたりから愛知県美術館を訪れるようになり、さらに開館10周年を記念して開催さ

れた「ミロ 1918-1945」の準備中に、当時学生だったのですが、ボランティア、アルバイトとして展覧会のお手伝いをさせていただきました。その時に、海外から作品を運んで日本で展覧会を行うためには、4-5年の準備期間が必要なことを知りました。その準備期間には、海外の美術館に展覧会の趣旨を説明して「どうしてもこの作品が展覧会に必要だ！」という熱い手紙を書き、アポを取って面談に出かける、断られても何度かトライする、それでも断られたら別の作品を提案してみる、などあの手この手で交渉を行い、少しずつ少しずつ形にしていく、そういう過程を着実に経てこそ、展覧会が実現することを目の当たりにしました。学生だった私は展覧会準備をする学芸員の方の仕事を間近で見て、「いつかはこんな展覧会を自分でも実現できる学芸員になれたらいいのにな…」などという思いが生まれたのでした。

さて、その後愛知県美術館の学芸員として勤めることになったのですが、勤め始めて間もない頃に、現館長が、当館のコレクションにあるデュフィの作品《サン=タドレスの浜辺》(1906年)について次のようなことを雑談の中で何気なく話されました。

「この作品は、フォーヴ時代の作品だけれど、マティスらドランの原色の激しい色使いとは違って、パステル調の優しい色調が、デュフィらしさを発揮している。後年のデュフィの色彩感覚は、彼が生まれ持った独自のもので、それがこの初期の作品にすでに現われているね。いつかデュフィ展やればいいのに…」

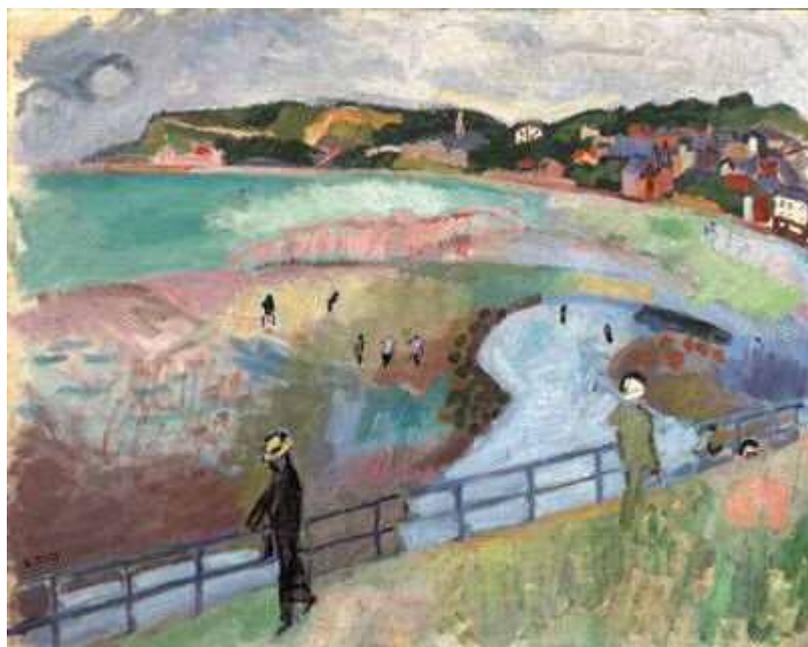
きっとご本人は忘れられていると思いますが(笑)、この館長の言葉によってデュフィという画家を強く意識するようになりました。とはいえ、目標が簡単に実現することはなく、この時点から館内で企画案を通すまでが一番大変だったように思います。なにせ、過去にはクレーやらクプカやらボナールやら、モダン・マスターの大規模展覧会を開催してきたプライドと伝統のある愛知県美術館の先輩学芸員の方々が、ついこの間まで学生としてアルバイトをしていた新人学芸員の企画を簡単に了承することなどないわけで…。そうこうして日常業務のあわたたしさにデュフィ展の企画案も忘れかけていた頃に、きっかけは思いがけないところからコロンとやってきました。

ある展覧会で共同主催をした新聞社の担当者の方と立ち話をしていた時に、どういう文脈かは忘れてしまったのですが、「デュフィっていいよね、いつかは展覧会やりたいよね」という話で盛り上がりました。その話の後、そ

の新聞社の方が上司に話をされ、関心を持っているようだから企画書を起こしてほしいと言われました。良い機会だと思い企画書案を提出したところ、新聞社ではデュフィ展を行いたいという回答がありました。その後館内会議に企画を提案し、新聞社も開催したい希望がある旨を伝え、何とか了解を得ることができました。

この館内会議から5年の歳月を経てようやく実現したこのデュフィの展覧会は、現館長の言葉がきっかけで生まれ、またその言葉は今回の展覧会のコンセプトの基盤にもなっています。鮮やかな色彩が溢れるデュフィ独自の画風がどのように形成されたのか、その過程がご覧いただける構成になっているのではないかと思います。

また、経験の浅い新米学芸員の一企画を受け入れる英断をしてくださった当時のC新聞社文化事業部部长、そして現館長だけでなく、館内会議で展覧会企画が通るまで応援してくださった現副館長などのサポートがあって、ようやくこの展覧会の準備がスタートしたのです。



▲展覧会のきっかけとなった愛知県美術館の所蔵作品《サン=タドレスの浜辺》(1906年)

今回は、展覧会準備の過程でフランスの美術館などどのようなやり取りをしたのか、もう少し具体的な内容をお伝えしたいと思います。(MRM)